

有田焼の歴史の中で、まだ明らかになっていない分野のひとつに赤絵、色絵の始まりのころの様子があります。

その発祥は、酒井田柿右衛門家に伝わる古文書の中の「覚」という資料にみることができます。この文書には南川原山の喜三右衛門（初代柿右衛門）が赤絵付けに成功し、その製品を長崎に持参して「かうじ町八観と申す唐人の所へそれがし宿仕り」加賀前田家の御用商人堀市郎兵衛に売り始めたのは、かりあん船（貿易船）が来航した年の六月初めころであると記されています。このかりあん船が来航した正保 3年(1647)という年に赤絵付けの技法が始められたといわれています。

その後、寛文年間(1661~1673)には赤絵町が成立していたことは稗古場・報恩寺に戦時中まであった鐘に「赤絵町」の文字が刻みこまれていたことから明らかですが、いつごろ赤絵町が出来上がったかというのははっきりしていません。

今回、有田町郵便局が新築されるのを機会に、その地面の下に赤絵町の歴史が眠っているのではないかと期待のもとに、現在発掘調査が進行中です。詳細は発掘レポート③ページをご覧ください。

有田町歴史民俗資料館

皿山びとの歌 No.3

皿山の風物



棺台にみる
皿山のくらし

このほど、戸矢地区より棺台（「がんじゃー」と呼んでいました）の寄贈があり、有志のかたがたによって退仏法要が営まれた後、資料館へ運び込みました。

人の一生で、定められた年齢にあたって行なわれる儀礼、例えば、お宮参りとか、七五三などを人生儀礼といいます。その最後を締めくくるのが「喪葬」という儀礼です。この棺台は今ではほとんど目にすることはありませんが、昭和30年代ごろまでは各地で使用されていたものです。各寺で保管してあったり、地区によっては墓地の傍に共有の棺台小屋を持っていて、そこに保管してありました。戸矢地区でも棺台小

屋がありました。古くなってきたので取り壊すことになり、棺台の取り扱いについて協議された結果、民俗資料ということで当館へいただくことになりました。県内でも保存例はあまりなく、貴重な資料です。

有田での葬送は、先提灯、花ぐい（かごに色紙を細かく切ったものをいれる）、旗、花（大根を芯にして色紙をはりつけたもの）、てんちゃ（四角の盆に米の粉だんごと湯飲みに入れたお茶）、野辺贈、位牌、棺と続きました。女性は白い綿帽子をかぶっていました。棺台は四人の男性がかついで寺の境内や、墓地の広場まで運びました。到着した棺台はそこで左回りに三回まわります。これは死者の霊が迷いもどらないための作法のようです。

今でも葬送に関して隣近所の協力が死者の親族の大きな支えとなっていますが、昭和30年代ごろまではさらにこまやかな心配りがなされていたようです。

今回は葬送という、ちょっと暗い話題となりましたが、民俗学的にとらえてみました。戸矢地区の皆様、ありがとうございました。



祇園祭り

夏の夜の過ごし方のひとつに、祇園祭りがあります。各地区の氏神さんの祭りで「ぎおん」と呼んでいます。

現在は7月24日の古木場地区に始まり、8月26日の大野地区まで、連日のように町内のあちこちで祭りが催されますが、最近では祭りというよりは社交の場として各家々で酒宴がくり広げられます。

有田での祇園祭りがいつごろから始まったのかは明らかではありませんが、『皿山代官旧記』の文化六巳年(1809)達帳には「来たる十四・十五日中野原祇園祭につき、例の通り鉦、太鼓を相鳴らしたく相達し候えども、右は存じ入りの筋これあり、相叶わず候。尤も致し来たりにてこれあるべく候えはく（これまでしてきた事であ

るから）神楽太鼓、或いは戸拍子など相鳴らし候儀は勝手次第に差し許す儀に候」とあります。これが何月であったかは明確ではありませんが、明治20年に記された『制度考』には郡庁の年中行事の中に「六月十五日中野原八坂神社ノ祭祀トス（祇園会ト云フ）」とあり、旧暦の6月15日が祇園祭りとされていたことがわかります。

このように、もともとは八坂神社の夏祭りを「ぎおん」と呼びならわしていたのが各地区の神社で催される祭りも「ぎおん」と呼ぶようになったものと考えられています。

いまではすたれてしまっていますが、生まれて初めて「ぎおん」を迎える子供には土製の人形を贈る習わしがありました。この人形は神社の境内や参道に出ている夜店で売っていたそうです。

きっと今年の夏も、有田の町では賑やかな夜がくり広げられることでしょう。くれぐれも、飲み過ぎにはご注意ください。

発掘レポート



赤絵町遺跡

発掘



有田町教育委員会では現在、赤絵町の有田郵便局の改築に伴う発掘調査を実施していますが、これまでに全国的にも例のない多量の赤絵製品や輸出品が出土し、注目を浴びています。

赤絵町はその名の通り、江戸時代の前期、寛文年間（1661～1673）ごろに藩の政策で赤絵屋を11軒だけに制限した際、9軒があった所とされています。つまり、有田の中でも赤絵町以外ではほとんど赤絵は作れなかったわけです。江戸時代の古文書には、藩が赤絵付けの技法がほかに漏れないように厳しい規制を加えていたことが記されています。

それによると赤絵具の秘伝は長男にしか伝授してはならず、たとえ家族でも教えることはできませんでした。また、赤絵屋で働いている職人はほかの仕事につくことはもちろん、ほかの赤絵屋で働くこともできず、病気で休む時も役所に届け出る必要がありました。

江戸時代後期の 赤絵町の姿が見え隠れ

このようにして藩が包み隠した赤絵町が具体的にどのような場所であったかと言うことが、今回の発掘調査で明らかになりつつあります。調査は5月16日から8月ごろまでの予定で、歴史

を逆に新しい層から古い層へと各時代の地面を出していきます。現在全体の約3分の1が終わったところで、江戸時代後期（18世紀後半～）の層を調査しています。この層は現在の地面を50～80cm掘ったところに出てきており、当時の有田が現在より低い位置にあったことを意味しています。

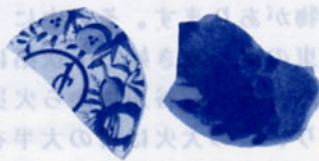


◀発掘風景

ちなみに事前の試掘調査で江戸時代の初めの地面は、現在より1m20cm～30cm低かったことがわかっています。江戸時代後期の層では石を並べた家の基礎や赤絵窯、井戸、溝などが発見されています。また、当時使っていた陶磁器類や古銭、釘やそのほかの金属製品、桶などの木製品も多量に出土しており、すでに数万点に及んでいます。

家は3～4軒発見されており、間口が狭く、奥行きが長い、現在有田に残っている江戸時代の家と同じ構造になっています。家と家の境は石垣で区切られ、家の裏に井戸や赤絵窯がありました。

期待どおりの出土陶片

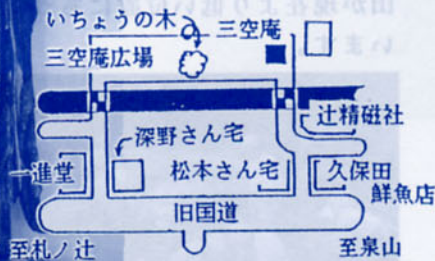


出土陶片ではオランダ東インド会社（V・O・C）の注文で作られたと考えられるVOCのマークの入った芙蓉手の皿や胴部にSマークを入れた染錦手の瓶などの輸出品、柿右衛門様式の製品、各地の大名などへの贈答品として生産された鍋島様式の皿など、珍しいものが多く出土しています。こういった製品をみると、現在にもけっして劣らない職人の技の冴えがひしひしと伝わり、過去の伝統が今日の有田を支えてきたことを改めて痛感させられます。



大地蔵

上幸平地区



昔の風情が残る上野田地区の裏通り、上幸平地区の三空庵に大地蔵があります。この地藏菩薩立像は高さ 191,5センチメートル、材は桧で江戸時代前期の作とみられています。最近の調査で、像の背後に文政 8年に京都四条通東洞院南江入ル東角の大仏師によって彩色が施されたと記されています。

また「文政11年8月9日の子(ね)の刻にあたり激しい雨風のなかで大火となったので、徳三郎が駆け付け、わが屋敷に運んだ…」ということが書かれていることがわかりました。

この文政11年の大火が、皿山の歴史の中で最も被害の大きいものだったことは、今でも多くの町民の間で語り継がれています。このとき九州地方は大暴風雨に見舞われていますが、皿山の被害の様子を書いた『浮世の有様』という書物があります。その中に「午後10時ごろから南東の風が吹き始めて次第に激しくなり…午前零時ごろ、岩谷川内から火災が発生した。」とあり、この大火は町の大半を焼き尽くすほどだったと言われています。

大地蔵の下部には、この時のものと思われる焼き焦げの跡が残っています。この地区の信徒の間には、この大火の時、信者が地藏さんを避難させようとしたが重くて動かせなかった。そこで「地藏さん、かるうて逃ぐっけん、軽うなってくんさい(背負って逃げるので軽くなってください)」と言うと、すっーと軽くなったので背負って逃げたという言い伝えが残っています。この大地蔵は「文政の大火」を今に伝える証人の一人です。

お知らせ

7月から古文書教室

7月から古文書教室を開催します。

- ・日程 7月～9月第1、第3土曜日 午後2時～
※7月のみ第3、第5土曜日です。
- ・講師 細川 章先生(佐賀女子短大講師)
- ・場所 有田町勤労者福祉会館3階和室B
- ・資料 池田家文書の文政7年の達帳
- ・希望者は若干の余裕がありますので民俗資料館までご連絡ください。

資料ご寄贈者名

- 有田町 青木安治氏 五右衛門風呂 1点
- 有田町 円田繁治氏 車力ほか 7点
- 有田町 手塚信雄氏 鬼瓦 2点
- 有田町 戸矢区 棺台一式
- 佐賀市 仏坂勝男氏 古絵図 1点

ありがとうございました

濃み筆のつぶやき

このところ、発掘現場で日ごと焼けていく腕を見つめながら働いています。連日泥まみれで帰宅する母親に、小三の息子は「何のお仕事をしよーと？」と尋ね、言葉につまりながら「土の中を掘っていくと江戸時代があってネ、そこにチョンマゲを結った人達が一生懸命焼き物を作っていた跡が残っていて…」と説明をしていますが、果たして母親の仕事をどこまで理解してくれていますやら。

現場を訪れる知人に「地下足袋姿がよく似合う」とほめられ(?)、進むべき道を誤ってしまったのではないだろうかと悩んだりしています。(葉)

有田町歴史民俗資料館報 皿山びとの歌 No.3

発行年月日 *昭和63年 7月 1日

編集・発行 *有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地
☎0955・43・2678